

その神のロゴスがこの世界に受肉する時、新しい創造に私たちは導かれるのである。

例えば、詩篇一九篇の賛歌は、「天は神の栄光を語り」と書き出して、声は聞こえなくとも「話を伝える」働きを被造物が担っていることを示し、その創造のみことばが啓示として作用していることを結語に強調している。啓蒙主義への批判者でもあったJ・ハマンは、創造とは「被造物を通しての被造物へのスピーチである」と定義し、O・バイヤーも、これが「キリスト教的創造論の本質」であると認めるのであった。創造的ロゴスなるキリストの受肉が、私たちに啓示をもたらすという、神の知恵である。また自然界の秩序と霊的秩序が、「創造の神の知恵としてのキリスト」(R・パーバー)——特にキリストのたとえ話——によって、有機的に統合されるという啓示である。さらに、シュトゥールマッハーが総括するように、「すべての創造は、ここ創造と贖いの仲介者としてのキリストに発している」と論究できるのではないだろうか。

この観点において、キリスト中心主義神学を展開したバルトに注意を向けたい。バルトは、創造論と契約論を同一視し、創造論の意味を探るためには、「創造よりも古い契約」に留意するのである。バルトの言う契約とは、神と人との間に交される契約というよりも、「創造主が被造物になったイエス・キリスト」にあるところの「創造主と被造物の合一性」が、創造の契約である。イエス・キリストの中に、創造の意味が秘められているのである。このキリストを起点とする創造と契約の構造を理解する時に、バルトの提唱する「無 *das Nichtige*」の意義が認められよう。「すべては良かった」という神の創造に合致しないもの——罪、悪、死の世界等——に対して、神は「否」を発せられたのである。しかも、そのすべてを包む世界を、恵みの教理としてバルトは捉える。そして、この「神の栄光の劇場」で信仰者が証しをするときに、神は「創造主として自らを正当化する」のである。

以上の論点から、「バルトの創造論は、三一神的であり、弁証法的である」と、T・ブラッドショーが要約するのは正当である。バルト神学は十字架の神学か否か、と問うことよりも先に、バルトの創造論がいかに三一神的な基盤と広がりをもっているかを観る方が、よりよい実が得られるように思われる。なお、バルトの三一神論に関しては、J・エンゲンのすぐれた研究を参照されたい。

ところで、バルトのいわゆる「自然神学」に対する反論も、当時のナチス台頭の状況下にあった「創造神学 *Schöpfungstheologie*」つまり国家(秩序)や人種差別(ユダヤ人)に対するものであったことも見逃してはならない。良心の問題を自然(国家・法・宗教)に求めないで、神の啓示に第一に聞くべきことを、ドイツ告白教会はバルメン宣言(一九三四年)にうたったのであった。

この構図を認めて、現代ドイツ神学者の代表格ともいえるJ・モルトマンは言う。「一九三〇年代において、創造論の問題は、神の知識にあった。今日、神論の問題は、創造の知識にある」。そこで、『創造における神』(一九八五年)をモルトマンは著したのである。

つまり、三一神論の問題が、現代神学の課題であり、それを創造論という具体的な場で展開することが解決策になるというのである。そこで、「三一神論的な相互内在の概念に対応するのが、生態学的創造論」となり、

そこから成立するのは、あらゆる事物の連関についての、もはや機械論的ではない、新しい理解である。いわゆる「素粒子」が世界の「構成要素」ではなく、それらの関連の調和が世界を構成するのである。……この三一的・生態学的創造論の目標は、安息(Sabbat)の教えである。

これがモルトマン自らが、その世界観を簡潔に要約したものである。現代にはびこる無神論と理神論を克服すべく、

新しい汎内神論 (Panentheism) を提示するゆえんである。しかしながら、その中核はユダヤ教のカバラー主義に拠るものであり、十字架の神学が「神の中の愛」における「神の中の死」であったように、カバラー的創造とは、神の中に無を創り出すことによるものである。⁽⁹⁶⁾したがって、モルトマンの巧みな三一神論と創造論の統合は、現代人に魅力的なものではあるが、明らかに聖書的ではない。その土台は、ユダヤ教的「神の熱情」であり、進化の概念とヘーゲル哲学がその方法論である。また、苦しみを基調にするモルトマンの民衆の神学は、「平和の神学と解放の神学」を⁽⁹⁷⁾目指すものであったが、「運動の中の神学」には、限界もある。⁽⁹⁸⁾それは、モルトマンが政治神学を自ら体験する中で、その限界を自覚するようになり、「いわゆる運動への生産的不参加」へと導かれたのであった。

バルトの三一神論を越えるべく始めたモルトマンの神学体系は、はたして創造論においてもバルトを克服したのであろうか。⁽⁹⁹⁾次項の主題である創造主キリストの要素を加えて、読者はモルトマンを判断されたい。

七、仲介者キリスト

創世記の時代から現代神学の発展に至るまで、いかに創造論が大切な主題であったかが伺える。と同時に、軽視されてきた弊害も多く目についた。その創造論が世界観でもあるとすれば、現代の私たちにはどのような手がかりが与えられているのだろうか。

例えば、創造と摂理の関係を保持する改革主義的世界観は、「創造者の主権的活動と創造による秩序の相関関係」を、創造の定義にする。この「法」を主体にするウォルターズの視点は、すぐれたキリスト教哲学からの洞察ではあるが、私としては「信仰の創始者であり完成者であるイエス」から創造論を考察してみたい。

すでに、創造者ロゴスとしてのイエスの存在に留意したが、「創造主であり贖い主」なるイエスに、私たちの信仰の接点、そして世界観を求めてみたい。宇宙と人類、神と人の仲介者としてのキリストである。

かつてオックスフォード大学キリスト教哲学教授 J・ウェブは、創造の問題を論じる項で、私たちの魂が神にその起源を持つことを述べるところの「創造と発生 of creation and generation」は、⁽¹⁰⁰⁾実には仲介者の教理によって私たちに与えられることを説いた。イエスを仲介者、ロゴスとして同一視することが、キリスト教の特殊性である。シャルダン『科学とキリスト』の中で、その関係を七〇年も前に独白している。

それ自体において、科学はキリストを発見できない。しかしながら、科学の学校で私たちの心の中に生まれた思慕を、キリストは満足させるのである。⁽¹⁰¹⁾

いわゆる宇宙的キリスト論の重要性に、導かれるのである。

たとえば、有名なコロサイ書三・15―20のキリスト賛歌は、単に高擧のキリストを崇めるものではなく、神・人・世界をキリストとの関係においてキリスト者が新しく理解するように意図されているのである。まさにキリストにおいて、新しい世界観が提示されていると言えよう。また、ヘブル書の壮大な構図においても、旧約と新約、天上と地上、大祭司といけにえ、という二つの対照的な要因を、キリストは仲介者として統合するのである。⁽¹⁰²⁾キリストの統治、それは宇宙全体に及ぶものである。さらに、原初の天地創造をその墮落から回復すべく、新しい天と地に再創造するのは、キリストの贖いの業である。

実にキリストなくして、創造論の意義を見出すことはできないのである。まして、終末論と世界の再創造への伏

線を読むこともできない。そこに神の知恵が、隠されているのではないだろうか。

このようなキリストの仲介者としての働きは、何によって成就されるのであろう。「ソーントン」は宇宙的キリストの働きを講じる中で、キリストの「しもべの姿」がその中核であると述べている。しもべの姿、これも神の知恵によるものであろうか。

とするならば、C・グントンが「創造と再創造」の論文で結論づけるように、イエスの「受肉と十字架と復活は、被造物を人間の創造的活動のために解放する」ものである。創造論の中でイエス・キリストを位置づけるのではなく、キリストのしもべの姿の中に創造論を「再創造」するものである。

このようなバースペクティブにおいて、「創造自体が、そのキリスト論的・終末論的な目的のあかしである」(H・ベルコフ)ことが、認識されるのである。宇宙大のキリスト像を、信仰者が日常生活の中で築き上げていく作業、それこそが真の創造論の名に価するものであろう。

したがって、イエス・キリストを通して、共に創造主と被造物との適切な相互作用の回復が、人間に生起するものである⁽¹⁰⁾。

非必然性の宇宙論を探求するトランスの結語は、実にキリストに集約されていたのであった。味わうべきことばである。S・ヤッキがコスモス論を論求した結語も、この観点からして大切な提言である。「まさに決定的な意味において、秩序(コスモス)を言うためには、まず第一に創造主を言明しなければならぬ」⁽¹¹⁾のである。しかも、創造主なるキリストにおいて。

八、現代文化と創造論

キリスト教的創造論を樹立するためには、宇宙的キリストを認識することにその鍵があった。その創造論を具現化したものが、世界観として特に文化に作用することが察せられる。この密接な関係に早くから気づいたのは、おそらくリチャード・ニーバーであり、名著『キリストと文化』⁽¹²⁾の中でキリストと文化の関係を五つに類型化している。

もちろん、現代文化は大勢において無神論的な色彩を濃くしている。「そしていまでは、創造性という語の母にあたる語——文化——自身もまた、空虚な会話の一部となり……いまや病理的な域に達した」⁽¹³⁾とアラン・ブルームは『アメリカン・マインドの終焉』として率直に述べている。さらに、聖書の創造論を否定していく思想も進行している。それは「破局創造」として作用するものであり、具体的には「グノーシス、カバラーそしてブレイク」⁽¹⁴⁾がある。(モルトマンも、このようなユダヤ思想に類似しているように思える)

このような状況にあって、私たちにはどのような手がかりが与えられているのであろうか。キリスト者の世界観を説く、ウォルターズは言う。「構造性と方向性という範疇を適用することによって、私たちは現代文化の他の色々な問題についても明確な聖書の視点より取り組むことができると思います」⁽¹⁵⁾と。その構造性と方向性とは、すでに考察した「キリストによる宇宙的再創造」である。時の流れに逆らうところの、高度で使命観のある信仰が要求されよう。

そこで、幾つかの実例を挙げて本論文を締めくくりたい。

宮田光雄氏は、聖書の象徴として動物を取り上げる。「平和のハト」はノアからピカソに至るまで、「政治的シンボルのリヴァイアサン」⁽¹⁶⁾はヨブ記からホッブスに至るまで、実に現代政治文化を解く要素になっていることを、宮田氏

は鋭く追求している。そこには創造主と被造物のかかわりが、象徴を通してではあるが、明白に表われている。

石井美樹子氏は、マリヤ拝崇を歴史文化の流れから観察する。新約時代から中世に至るまで、聖画に描かれた『聖母マリヤの謎』⁽¹⁶⁾を、巧みに考察している。社会における女性の地位と関連させているのは興味深い。しかしながら、父性と母性を神観の中にまで読み込むのは、少し無理があるように思われる。

ユニオン神学校の小山晃佑氏は、自らの神学的巡礼を『富士山とシナイ山』⁽¹⁷⁾に著わし、宗教的に二つの山が対照的な思想を形成していることを論求している。その終末論的パースペクティブは、現代文化を判断する明確な基準を与えている。

「日本の神学」を樹立していくためにも、この視座は欠くことのできないものである。大木英夫氏は、方法論的な考察として次のような提言をする。

日本の精神は、聖書という「虎穴」に入らねばならないのではないか。そこから真正の新しい文化形成がでてる。今日クリエティヴィティ（創造性）が問題にされるが、それはこの精神の冒険から出てくるはずである。⁽¹⁸⁾

信仰生活の中に聖書を土台としていくことが、文化形成に導き、創造性を養うというのである。実に、聖書全体、キリスト全体を、私たちの世界観（宇宙）の中に充満させていくこと、そこに本来の創造論の意義があるのではないだろうか。実に、聖書の始まりと終りは、創造論にあることは明白である。とすれば、すべての聖書教理は創造論という「虎穴」に入れることができるのではないだろうか。聖書の雄大なパノラマが、創造論の中に挿入句として置かれていると観れば、そこに生きた創造論を再発見するかもしれない。

(註)

- (1) James Houston, *I Believe in the Creator* (Grand Rapids : Eerdmans, 1980).
- (2) エドウィン・M・ウォルターズ『キリスト教の世界観』宮崎誠明訳（聖書学研究所、一九八九年）。
- (3) Immanuel Kant, "Cosmology," in his *Lectures on Philosophical Theology* E. T. (Ithaca : Cornell University Press, 1986) pp. 81-99.
- (4) Alistair E. McGrath, *Iustitia Dei: A history of Christian doctrine of Justification*, vol. 2 (Cambridge University Press, 1986) pp. 149-154. またカントの『神学論』を参照せよ。 M. Despland, *Kant on History and Religion* (Montreal : McGill-Queen's University Press, 1973). David McKenzie, "Kant and Protestant Theology" *Encounter*, 43 (1982) pp. 157-167. Emil Fackenheim, "1. Kant" in *Nineteenth Century Religious Thought in the West*, vol. 1 (Cambridge U. P., 1985) pp. 17-40. John McIntyre, "New help from Kant," in *Religious Imagination*, ed. by J. Mackay (Edinburgh University Press, 1986) pp. 102-122. Allan Galloway (eds), *The Science of Theology*, vol. 1 (Eerdmans, 1986) pp. 225-261. Colin Gunton, *The Actuality of Atonement* (Edinburgh : T. & T. Clark, 1988) pp. 3-9.
- (5) Cf. Falk Wagner, "Die Aufhebung der religiösen Vorstellung in den philosophischen Begriff," *Neue Zeitschrift für Systematische Theologie und Religionsphilosophie*, 18 (1976) pp. 44-73. Peter Koslowski, "Hegel——der Philosoph der Trinität?" *Theologische Quartalschrift*, 162 (1982) pp. 105-131. James Yerkes, *The Christology of Hegel* (Albany : State University of New York Press, 1982). Rolf Ahlers, "Hegel's Theological Atheism," *Heythrop Journal*, 25 (1984) pp. 158-177. Dale Schlitt, *Hegel's Trinitarian Claim : a critical reflection* (Leiden : E. J. Brill, 1984). O. Kaiser, "Hegels Religionsphilosophie," *Neue Zeitschrift für Systematische Theologie und Religionsphilosophie*, 28 (1986) pp. 198-222.
- (6) Peter Hodgson, "Alienation and Reconciliation in Hegelian and Post-Hegelian perspective," *Modern Theology*, 2 (1985) pp. 42-63. Peter Hodgson, "G. W. F. Hegel," in *Nineteenth Century Religious Thought in the West*, vol. 1 (Cambridge U. P., 1985) pp. 81-121.

- (7) F. Schleiermacher, *The Christian Faith* E. T. (Edinburgh : T. & T. Clark, 1928).
- (8) *Ibid.*, pp. 142-156.
- (9) B. A. Gerrish, "Nature and the Theater of Redemption : Schleiermacher on Christian Dogmatics and the creation story," *Ex Auditu*, III (1987) pp. 120-136. 又Gerrish B. A. Gerrish, "Friedrich Schleiermacher," in *Nineteenth Century Religious Thought in the West*, vol. 1 (Cambridge U. P., 1985) pp. 123-156. H. D. Lange (ed), *Friedrich Schleiermacher* 1768-1834 : Theologie—Philosoph—Pädagoge (Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 1985).
- (10) *Ibid.*, p. 136.
- (11) Albrecht Ritschl, *The Christian Doctrine of Justification and Reconciliation* E. T. [Rechtfertigung und Veröhnung] (Edinburgh : T. & T. Clark, 1900). Philipp Hefner, *Faith and the Vitalities of History* : A. Ritschl (New York : Harper & Row, 1966). James Richmond, *Ritschl : A reappraisal* (Glasgow : Collins, 1978).
- (12) S. W. Sykes, "Theological Study : The nineteenth century and after," in *The Philosophical Frontiers of Christian Theology*, ed. by B. Hebblethwaite (Cambridge U. P., 1982) pp. 95-118. A. McGrath, *Iustitia Dei* (C. U. P., 1986) pp. 159-170.
- (13) Claude Welch, *Protestant Thought in the Nineteenth Century*, vol. 2 (New Haven : Yale University Press, 1985) p. 30.
- (14) Paul Tillich, *Systematic Theology*, vol. 1 (University of Chicago Press, 1951) pp. 252-270.
- (15) Robert Cushman, *Faith Seeking Understanding* (North Carolina : Duke University Press, 1981) pp. 254-255.
- (16) Charles Hodge, *Systematic Theology*, vol. 1 (Eerdmans, 1977) pp. 551-574.
- (17) *Collected Writings of John Murray*, vol. 2 (Edinburgh : Banner of Truth, 1977).
- (18) F. Scheifer, *Pollution and the Death of City* (Illinois : Inter Versity Press, 1973).
- (19) 岡田実『改革派神学概論』(聖徳学院所出版 一九八五年) 六八頁。この「創造」を、その神学上の理解しなく限りの聖書の神観さにかんづいては、あなご(同、五九頁)。
- (20) 熊沢義宣「創造」『キリスト教組織神学事典』(教文館、一九八三年) 二二二頁。
- (21) 小川圭治「生ける神——神観」『教義学とは何か』兩宮・村上編(日本基督教団出版局、一九八七) 参照。
- (22) 大川和彦『三一神論——キルケゴールとヘンゲルをめぐって』(一九八九年) 参照。
- (23) 上田光正「創造・人間・罪——創造論」『教義学とは何か』(一九八七年) 九四頁。
- (24) 同、一一三頁。
- (25) Stanley Jaki, *Cosmos and Creator* (Edinburgh : Scottish Academic Press, 1980) p. 57.
- (26) 藤原隆夫『創世と種族』(小笠原書局、昭和四十二年) 一五頁。
- (27) M. Wakeman, "Chaos," in *The Interpreter's Dictionary of the Bible*, Supplementary vol. (Nashville : Abingdon, 1976) pp. 143-145. O. Keel, *The Symbolism of the Biblical World* E. T. (New York : Seabury Press, 1978).
- (28) H. Berkhof, *Christian Faith* E. T. (Grand Rapids : Eerdmans, 1979) p. 153.
- (29) Richard Bauckham, "First Step to a Theology of Nature," *Evangelical Quarterly*, LVIII (1986) p. 244.
- (30) S. Talmon, "The Biblical Understanding of creation in the Bible and in Jewish tradition," *Ex Auditu* (1987) p. 118.
- (31) *Ibid.*, p. 119. B. S. Childs, *Introduction to the Old Testament as Scripture* (Philadelphia : Fortress Press, 1979) p. 155. Von Rad, *Old Testament Theology* E. T. (New York : Harper & Row, 1962) pp. 136-141.
- (32) Donald Mackinnon, *Themes in Theology* (Edinburgh : T. & T. Clark, 1987) p. 43.
- (33) S. Jaki, "The Universe in the Bible and in the modern science," *Ex Auditu*, III (1987) pp. 145-146. Cf. H. Berkhof, *Christian Faith* (1979) pp. 160-161.
- (34) Herbert McCabe, *God Matters* (London : Chapman, 1987) p. 5.
- (35) S. Jaki, *Cosmos and Creator* (Edinburgh : Scottish Academic Press, 1980) p. 63.
- (36) T. F. Torrance, *Divine and Contingent Order* (Oxford University Press, 1981) pp. vii, 3f.
- (37) Dons Scotus, quoted in Torrance, *Ibid.*
- (38) Richard Swinburne, *The Coherence of Theism* (Oxford University Press, 1977) p. 148.
- (39) R. Bauckham, "First Step to a Theology of Nature," *Evangelical Quarterly*, (1986) p. 239. Geddes MacGregor,

The Nicene Creed (Grand Rapids : Erdmans, 1980) p. 22. Cf. Walter Eichrodt, *Theology of the Old Testament* E. T. vol. 1 (London : SCM, 1961) pp. 406-415.

(40) H. Berkhof, *Christian Faith*, p. 176.

(41) Chris Goussmett, "Creation Order and Miracle according to Augustine," *Evangelical Quarterly*, LX (1988) pp. 217-240.

(42) R. Hooykaas, *Religion and the Rise of Modern Science* (Edinburgh : Scottish Academic Press, 1973) p. 35. (邦語版) Cf. S. Jaki, *Cosmos and Creator* (1980) p. 82.

(43) カルヴァン『キリスト教教義論』一、渡辺信夫訳(新教出版社、一九七三年)第一編。

(44) Helmut Thielicke, "The Godless World and the Worldless God," in *Church, Word and Spirit* : FS G. W. Bromiley eds. by J. Bradley and R. Muller (Grand Rapids : Erdmans, 1987) pp. 291-298. Cf. M. Beintker, "Das Schöpfercredo in Luthers Kleinem Katechismus," *Neue Zeitschrift für Systematische Theologie und Religionsphilosophie*, 31 (1989) pp. 1-17.

(45) T. F. Torrance, *Space, Time & Incarnation* (Oxford University Press, 1969) pp. 30f, 50.

(46) 青木靖三『カリベネ・カリベネ』(岩波書店、一九六五年) 七十七頁。

(47) Herbert Butterfield, *The Origins of Modern Science* (London : Bell & Hyman, 1957) p. 9.

(48) *Ibid.*, p. 36.

(49) *Ibid.*, p. 66.

(50) 樺山紘一『中世からの光』(王国社、一九八九年) 一一八頁。

(51) 同、一二三頁。清水純一『シュルマン・フルーン研究』(創文社、一九八六年) 参照。

(52) R. Hooykaas, *Religion and the Rise of Modern Science* (Edinburgh : Scottish Academic Press, 1972) p. 83.

(53) 柳生直行『生一本のキリスト教』(新教出版社、一九八七年) 三十五頁。

(54) 同、三十五頁。

(55) 樺山紘一『中世からの光』一〇六—一〇七頁。

(56) Andrew Louth, chpt. II "The Legacy of the Enlightenment," in *Discerning the Mystery* : An essay on the nature of Theology (Oxford : Clarendon Press, 1983).

(57) H. E. テーテ『ハイデルベルクにおけるウェルター・ヤン・ヤン・ヤン』宮田光雄・石原博訳(創文社、一九八八年) 一一七頁。

(58) 同、一二四頁。

(59) 同、一三三頁。

(60) B. B. Warfield, *Studies in Theology* (New York : Oxford University Press, 1932) p. 235.

(61) G. M. Marsden, "Creation versus Evolution : no middle way," *Faith and Thought*, 110 (1983) p. 138.

(62) D. Livingston, quoted in Marsden, *Ibid.*

(63) Henry Drummond, *The New Evangelism and Other Papers* (London : Hodder & Stoughton, 1899) p. 174.

(64) *Ibid.*, p. 177.

(65) Henry Drummond, *Natural Law in the Spiritual World* (London : Hodder & Stoughton, 1888) p. 407.

(66) Denis Duncan, "Afterword," in H. Drummond, *The Greatest Thing in the World* (London : Hodder and Stoughton, 1980) p. 62.

(67) James Moore, "Evangelicals and Evolution : Henry Drummond, Herbert Spencer and the Naturalisation of the Spiritual World," *Scottish Journal of Theology*, 38 (1985) p. 410.

(68) Teilhard de Chardine, *Le Milieu Divin* : An essay on the interior life E. T. (London : Collins, 1960) p. 123.

Cf. Chardine, *Science and Christ* (Collins, 1968). シュルマン『総ての事』(福音堂、一九七四年) 参照。

(69) *Ibid.*, *Le Milieu Divin*, p. 131.

(70) D. M. Mackinnon, *Themes in Theology* (Edinburgh : T. & T. Clark, 1987) p. 194. Cf. C. Mooney, *Teilhard de Chardine and the Mystery of Christ* (Collins, 1966), U. King, *Toward a New Mysticism* (Collins, 1980).

(71) Douglas Spanner, *Biblical Creation and the Theory of Evolution* (Exeter : Paternoster Press, 1987) reviewed in *Themelios*, 14 (1989) pp. 77-78.

(72) Michael Polanyi, *Personal Knowledge* : towards a post-critical philosophy (London : Routledge & Kegan Paul,

- 1958) pp. 303f. M. Polanyi, *Knowing and Being* (London : Routledge, 1969) pp. 133-148.
- (73) M. Polanyi, *Personal Knowledge*, p. 405.
- (74) 小田垣雅也『現代思想の中心』(新地書房、一九八八年)一三三頁。
- (75) D. カーネギー『人生のヒント』高教社(三書房、一九八六年)一一二頁。
- (76) T. F. Torrance, *Theological Science* (Oxford University Press, 1969).
- (77) T. F. Torrance, *Reality and Scientific Theology* (Edinburgh : Scottish Academic Press, 1985) reviewed by D. Ford in *Scottish Journal of Theology*, 41 (1988) pp. 273-280.
- (78) Kathryn Tanner, *God and Creation in Christian Theology : Tyranny or Empowerment ?* (Oxford : Basil Blackwell, 1988).
- (79) *Ibid.*, p. 169.
- (80) John Houghton, "New Ideas of Chaos in Physics," *Science & Christian Belief*, 1 (1989) p. 49. Cf. John Polkinghorne, *Science and Creation : The search for understanding* (London : SPCK, 1988) reviewed in *Ibid.*, pp. 75-77.
- (81) Walter Thorsen, "The Spiritual Dimension of Science," in C. Henry (ed), *Horizons of Science* (New York : Harper & Row, 1978) p. 244.
- (82) T. S. Eliot, *On Poetry and Poet* (London, 1957) p. 112. quoted in A. Louth, *Discerning the Mystery* (1983) p. 103.
- (83) Oswald Bayer, *Schöpfung als Anrede : Zu einer Hermeneutik der Schöpfung* (Tübingen : J. Mohr, 1986) p. 16. quoted in *Ex Auditu*, III (1987) p. 13.
- (84) R. S. Barbour, "Creation, Wisdom and Christ," in R. McKinney (ed), *Creation, Christ and Culture* : FS Torrance (Edinburgh : T. & T. Clark, 1976) p. 38f.
- (85) Peter Stuhlmacher, "The Challenge of the Ecological Crisis to Biblical Theology," *Ex Auditu*, III (1987) p. 11.
- (86) Karl Barth, *Dogmatics in Outline* E. T. (London : SCM, 1949) p. 63.
- (87) *Ibid.*, p. 64. Cf. Allen Galloway, "Creation and Covenant," in *Creation, Christ and Culture* : FS Torrance (1976) p. 118.
- (88) *Ibid.*, p. 57.
- (89) *Ibid.*, p. 58. Cf. K. Tanner, *God and Creation in Christian Theology* (1988) pp. 80, 87.
- (90) Timothy Bradshaw, *Trinity and Ontology : A comparative study of the theologies of K. Barth and W. Pannenburg* (Edinburgh : Rutherford House, 1988) pp. 58, 302f.
- (91) E. Jungel, *Karl Barth* : a theological legacy E. T. (Philadelphia : Westminster Press, 1986) E. Jungel, *The Doctrine of the Trinity* : God's being is in becoming E. T. (Edinburgh : Scottish Academic Press, 1976).
- (92) James Richmond, "God and the Natural Orders : Is there permanent validity in Karl Barth's warning to natural theology," in A. Kee (eds), *Being and Truth* : FS MacQuarrie (London : SCM, 1986) pp. 400f.
- (93) J. Moltmann, *God in Creation* : an ecological doctrine of creation E. T. (London : SCM, 1985) p. xi.
- (94) J. Moltmann, *God in Creation*, pp. xiii, 87.
- (95) 大正學報『三一』(1942)一〇六―一〇四頁。Cf. Brian J. Walsh, "Theology of Hope and the Doctrine of Creation : an appraisal of J. Moltmann," *Evangelical Quarterly*, LIX (1987) pp. 53-76.
- (96) J. Moltmann (ed), *Friedenstheologie—Befreiungstheologie* (München : Kaiser, 1988) pp. 7-14.
- (97) 『キリスト教』一〇一七頁。
- (98) 『キリスト教』一〇一七頁。
- (99) 『キリスト教』一〇一七頁。
- (100) J. Moltmann, "Schöpfung, Bund und Herrlichkeit : Zur Diskussion über Karl Barths Schöpfungslehre," *Evangelische Theologie*, 48 (1988) pp. 108-127. reviewed in *Neue Zeitschrift für Systematische Theologie und Religionsphilosophie*, 31 (1989) pp. 116-117.
- (101) A. カンタート『キリスト教』四〇頁。
- (102) C. C. J. Webb, *God and Personality* (London : George Allen & Unwin, 1919) p. 181.

- (93) T. de Chardine, *Science and Christ*, E. T. (London : Collins, 1968) p. 36.
- (94) N. T. Wright, *Colossians and Philemons* : an introduction and commentary (Leicester : I. V. P., 1986) p. 80.
- (95) Paul Ellingworth, "Jesus and the Universe in Hebrews," *Evangelical Quarterly*, LVIII (1986) pp. 337-354.
- (96) L. S. Thornton, *The Dominion of Christ* : the form of the servant (London : Dacre Press, 1952) p. 37.
- (97) Colin Gunton, "Creation and Re-Creation : an exploration of some themes in aesthetics and theology," *Modern Theology*, 2 (1985) p. 18.
- (98) H. Berkhof, *Christian Faith*, p. 169.
- (99) T. F. Torrance, *Divine and Contingent Order* (1981) p. 136.
- (100) S. Jaki, *Cosmos and Creator* (1980) p. 141.
- (101) Richard Niebuhr, *Christ and Culture* (New York : Harper & Row, 1951).
- (102) マラン・ブルーム『アメリカン・マインズの終焉』菅理盾樹訳(みすず書房、一九八八年)一九七頁。
- (103) ハロルド・ブルーム『アムーン——〈逆構築批評〉の超克』高市順一郎訳(晶文社、一九八六年)一〇一—一二三頁。
- (104) アルバート・ウォルタース『キリスト者の世界観』一七三頁。
- (105) 宮田光雄『平和のハットとリヴァイアサン』(岩波書店、一九八八年)。
- (106) 石井美穂子『聖母マリアの謎』(白水社、一九八八年)。
- Cf. H. Küng und J. Moltmann (eds), *Was geht uns Maria an ?* (Güterloh : Gerd Mohn, 1988).
- (107) Kosuke Kayama, *Mount Fuji and Mount Sinai* : A pilgrimage in theology (London : SCM, 1984).
- (108) 大木英夫『日本の神学』(モルダム社、一九八九年)二九六頁。

(高松・元山キリスト教会・牧師)